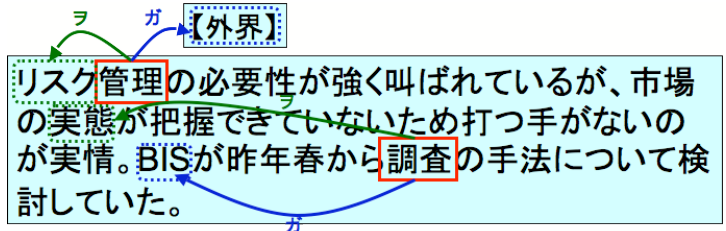


2. 現在までの研究状況 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること。様式の改変・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述すること。
 - ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について、問題点を含め①で記載したことと関連づけて説明すること。
- なお、これまでの研究結果を論文あるいは学会等で発表している場合には、申請者が担当した部分を明らかにして、それらの内容を記述すること。

近年計算機の処理能力の向上と記憶容量の増大に伴い、膨大な量のデータに基づいた統計的な自然言語処理が盛んになった。特に形態素解析・構文解析といった領域では計算機を用いた統計的な手法が活発に研究されており、成熟しつつある統語レベルの解析から、意味レベルの解析への研究が盛り上がりを見せている。高精度な意味解析は、自動要約や情報抽出、質問応答システムや機械翻訳といった自然言語処理のアプリケーションを高度化するために必須の技術である。そういった技術の一つに、述語がどのような要素(項)を伴うかを解析する述語項構造解析がある。申請者は Gildea and Jurafsky によって問題設定された動詞を対象にした意味役割付与(Semantic Role Labeling)¹を念頭に置き、特に日本語の事態性名詞を対象にした項構造解析を行ってきた。

事態性名詞とは動作・状態・経験を表す意味を持つ名詞のことで、日本語ではサ変名詞(「推薦」など)、動詞由来の名詞(「動き」など)などが該当する。Grimshawによると、対応する動詞を持つ事態性名詞は、事態を表す意味で使われるとき、項構造を持つ²。



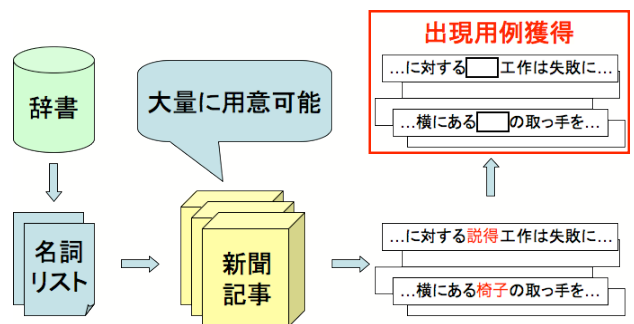
申請者は日本語の事態性名詞のうち、特にサ変名詞に対し、ガ格・ヲ格・ニ格を対象に項構造を解析する研究を行っている。たとえば右の例では「【外界】(※文内にはない実体を指す特殊なラベル)ガ リスクヲ管理(する)」および「B I Sガ 実態ヲ 調査(する)」といった関係を自動的に認識することが目標である。

述語項構造解析がある程度実用的な範囲で解析できるのに対し、事態性名詞の項構造解析における問題は、大きく分けて2つある。一つの問題点は、述語が常に項構造を持つものに対し、事態性名詞の中には「電話」のように「電話する」という動作を表す用例と「電話機」という物体を指す用例と複数の意味を持つ名詞があり、前者が項構造を持つものに対し、後者は項構造を持たないので、文脈に応じて事態性名詞に事態性があるかどうか判定しなければならないことである。この処理を事態性判別と呼び、事態性のある名詞に対して項を同定する処理のことを項同定と呼ぶ。もう一つの問題点は、述語の項構造解析においては、述語と項の含まれる文節間が係り受け関係になっている場合が8割程度あるのに対し、事態性名詞の項構造解析においては、事態性名詞と項の文節間が係り受け関係になっているものは2割、同一名詞句内に項がある場合が4割程度と、文節間の係り受けによらない意味解析を行わねばならないという問題がある。

そこで申請者たちは事態性名詞の項構造解析のためのタグつきコーパス作成と、それを用いた解析に取り組んできた。このコーパスは新聞記事(京都テキストコーパス Version 3.0)を対象に、事態性を持つ名詞について項構造(サ変名詞を動詞化した場合のガ格・ヲ格・ニ格)を手で付与したもので、申請者はコーパスの仕様を策定し、現在までに京都テキストコーパス全体に対してタグ付けを行い、2006年10月からNAIST テキストコーパスとして <http://cl.naist.jp/nldata/corpus/> において公開している。

申請者は機械学習の手法を用い、事態性名詞の項構造解析を①事態性判別と②項同定という手順に分けて問題を解く。事態性判別は文中に出現する事態性名詞を事態性ありと事態性なしの2クラスに分類する問題と考え、大規模なタグなしコーパスから事態性に関して曖昧性のない事例を用いて教師なしの学習を行うことで事態性判別に有用な構文パターンを自動で獲得する手法を提案した。

教師なし学習においては、常に事態性のある用例しか持たない事態性名詞のリストと常に事態性のない用例しか持たない一般名詞のリストを用意し、新聞記事約1ヶ月分中でそれぞれのクラスの名詞が含まれる文を取得、事態性ありの事例を正例・事態性なしの事例を負例として学習する(右図)。学習には Boosting³ アルゴリズムによる機械学習器 BACT⁴ を用いた。BACT は文の木構造を素性として用いることにより、訓練事例の判別に効果が高い部分木構造を構文パターンとして学習できる。



(1) Gildea, D., Jurafsky, D., Automatic Labeling of Semantic Roles, Computational Linguistics, 28(3), pp.245-288, 2002.

(2) Grimshaw, J., Argument Structure, 1990, The MIT Press.

(3) Freund, Y., Schapire, E., A Decision-theoretic Generalization of On-line Learning and an Application to Boosting, Journal of Computer and System Sciences, 55(1), pp.119-139, 1997.

(4) Kudo, T., Matsumoto, Y., A Boosting Algorithm for Classification of Semi-Structured Text, Proceedings of the 2004 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP 2004), pp. 291-298, 2004.

申請者氏名 小町守

この手法によって獲得した構文パターンを用い、事態性に曖昧性のある名詞 1,237 事例(うち 590 事例が事態性あり)を対象に、事態性判別実験を行った。文構造を含めた素性は Support Vector Machines⁵ を使用して学習した。文構造を素性に用いなかった場合は精度 72.3%・再現率 58.7%、用いた場合は精度 73.3%・再現率 80.2%と再現率を大幅に向上させることができ、提案手法の有用性を示すことができた。

また、項同定に関しては新聞記事 30 年分および Web から取得した 5 億文を用いて計算した動詞と名詞の共起スコア、そして事態性名詞に特徴的な構文パターンを用いることの有用性を示す研究を行った。大規模なタグなしコーパスから獲得した共起を用いることにより、述語項構造解析のモデル⁶ を事態性名詞の項同定にそのまま適用した場合に比べ、ガ格の同定において精度が 60.5%から 67.1%に向上することを示した。さらに、誤り事例の分析を通じて述語の項が事態性名詞の項にもなっている現象 (support verb construction) の解析が事態性名詞の項構造解析に必要であることを明らかにした。現在は述語と事態性名詞で項を共有するパターンに関する辞書を作成している。

ここで示した事態性名詞の項構造解析および述語項構造解析器の応用として、統計的機械翻訳における翻訳句の並べ替えの前処理を行い、述語項構造解析の有効性を示した。構文解析の結果を用いて統計的機械翻訳を行う先行研究は Yamada and Knight によって行われている⁷が、述語項構造解析や事態性名詞の項構造解析といった意味解析を用いた統計的機械翻訳の研究はこれまでに行われていないものである。

これらの研究結果は申請者が中心となって研究を進め、2006・2007 年の言語処理学会第 12・13 回年次大会、そして International Workshop on Spoken Language Translation (IWSLT) 2006 において口頭で発表した。また、申請者が事態性名詞のコーパス仕様の設計と作成に携わった NAIST テキストコーパスについては情報処理学会自然言語処理研究会および言語処理学会第 13 回年次大会にて発表した。

(5) Vapnik, V., *Statistical Learning Theory*, 1998, Wiley.

(6) Iida, R., Inui, K., Matsumoto, Y., Exploiting Syntactic Patterns as Clues in Zero-Anaphora Resolution, 21st International Conference on Computational Linguistics and 44th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (COLING/ACL), pp.625-632, 2006.

(7) Yamada, K., Knight, K., A Syntax-based Statistical Translation Model, Proceedings of the 39th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL), pp. 523-530, 2001.

計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入すること。

ここまでは事態関係に注目して研究を行ってきたが、名詞間の関係は、事態関係以外にも属性関係・役割関係・時間関係・場所関係といったさまざまな関係があり、特に質問応答システムや対話システムといった応用を考えると、事態関係以外のこれらの関係を計算機によって認識することが重要である。

名詞の項構造解析は 90 年代に行われたアメリカ主導の MUC¹ や ACE² といったプロジェクトによって行われてきたが、これらのプロジェクトは軍事的背景によって進められているため、テロの発見といった特殊な目的のために必要な関係解析に重きを置いており、コーパスの仕様が偏っているという問題がある。

そこで、日本語でさまざまなアプリケーションに組み込める汎用性の高い名詞の項構造解析を行うために、分野に依存しないタグつきコーパスの設計と作成、そして解析手法を提案する。また、日本語では英語における WordNet³ のような大規模に人手で作成したシソーラスがフリーで存在しないため、できるだけ少ないコストでシソーラスを作成する手法が求められている。

自動的な名詞の項構造解析における先行研究には Girju et al⁴ や Pantel and Pennacchiotti⁵ がある。Girju et al によると、ある程度の関係性に関する語義タグ付きのコーパスと WordNet があれば名詞の項構造解析を精度よく行えるが、現在日本語に関してはいずれも存在していない。また、Pantel and Marco の研究における名詞の項構造解析モデルは、正規表現のパターンで表現されるものであるが、これを事態性名詞の項構造解析モデル相当のもので置き換えることにより、タグつきコーパスから複雑な素性の組み合わせを学習して高度な解析を行うことが期待できる。

(1) Hirschman, L., MUC-7 coreference task definition. Version 3.0, 1997.

(2) Doddington, G., Mitchell, A., Przybocki, M., Ramshaw, L., Strassel, S. and Weischedel, R., Automatic Content Extraction (ACE) program, task definitions and performance measures, Proceedings of the 4rd International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2004), pp. 837-840, 2004.

(3) Fellbaum, C. (Eds.), WordNet: An Electronic Lexical Database, The MIT Press.

(4) Girju, R., Badulescu, A., and Moldovan, D., Automatic Discovery of Part-Whole Relations, Computational Linguistics, 32 (1), 2006.

(5) Pantel, P., and Pennacchiotti, M., Espresso: Leveraging Generic Patterns for Automatically Harvesting Semantic Relations, Proceedings of the 21st International Conference on Computational Linguistics and the 44th annual meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL), pp. 113-120, 2006.

申請者氏名 小町守

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること)

- ①研究目的、研究方法、研究内容について記述すること。
- ②どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入すること。
- ③なお共同研究の場合には、申請者が担当する部分を明らかにすること。
- ④研究計画の期間中に異なった研究機関（外国の研究機関等を含む）において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載すること。

本研究は、さまざまな形で現れる言語表現を同義であると認識することを目的としている。たとえば、現在までの研究状況で延べたような事態関係に関しては、「**原子爆弾がドームを破壊した**」という事態に対し、以下の4つの同義な表現が考えられる。

1. 「**原子爆弾がドームを破壊した**」
2. 「**ドームが原子爆弾によって破壊された**」(受動態)
3. 「**原子爆弾によって破壊されたドーム**」(名詞節)
4. 「**原子爆弾によるドームの破壊**」(名詞化)

1,2,3は従来の述語項構造解析の対象となっているが、4は述語項構造解析の対象とはなっておらず、申請者たちが作成した NAIST テキストコーパス中でも述語と事態性名詞の頻度は4:1程度であり、自然言語理解のためには事態性名詞の項構造解析も必須であると考えられる。同様に「**お好み焼きがおいしい店**」という関係に対しては、以下のような同義表現が考えられる。

1. 「**お好み焼きのおいしい店**」
2. 「**お好み焼きがおいしい店**」(述語化)
3. 「**うまいお好み焼きの店**」(同義語の使用・形容詞の移動)
4. 「**松味(※店名)お好み焼きマイウ〜〜！！**」(固有表現・助詞の脱落・同義語の使用)

特に最後の事例のように、Web のデータを解析するような応用を考えると、助詞の脱落や常に新語が生成される口語に近い同義表現といった Web の書き言葉特有の問題があるほか、計算機による解析では認識に失敗しがちな固有表現の認識も大きな問題となる。

そこで、解析に対するアプローチとして以下の3つの処理および評価方法を提案する。

1. 複合名詞句の解析

事態性名詞の項構造解析を行ってきた経験から、複合名詞句内に項が出現する場合、解析を行う項構造に特有の構文パターンを用いることが解析に非常に有効であることが分かっている。そこで、申請者は複合名詞句内の解析を行い、事態関係・属性関係・役割関係など、任意の関係についてそれぞれの項構造の判別に有効な構文パターンを半自動で獲得する手法の研究を行う。

2. シソーラスの自動構築

複合名詞句の解析を行うことによって、高精度で関係性を判定することができる構文パターンを獲得し、新聞記事や Web データなどの大規模なタグなしコーパスを用いて日本語のシソーラスを自動で構築する。同時に Web 上のブログデータを用いた固有表現(「松味」のような店名)および評価表現(「マイウ〜」や「安い」といった対象に対する評価)の抽出を行う。

3. 名詞句の項構造解析

複合名詞の解析によって獲得された構文パターンおよび半自動で構築したシソーラスを用い、事態性名詞の項構造解析で使用したものと同様の手法を用いてタグつきコーパスに機械学習の手法を適用し、名詞句の①関係性判別および関係性のある名詞句の②項同定を行う。

4. 統計的機械翻訳への応用

研究計画の期間中には、NTT コミュニケーション基礎科学研究所との統計的機械翻訳に関する共同研究に従事する予定である。この共同研究では日英・中英の統計的手法に基づいた機械翻訳を行い、申請者はそのうち日本語から他言語への句の対応付けを行う研究に取り組む。ここで用いる統計的機械翻訳器に対し、名詞句の項構造解析および自動獲得した名詞のシソーラスを用いた意味解析を組み込み、名詞句の項構造解析の有用性の評価を行う。

(3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載すること。

- ①これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ②国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

事態性名詞の項構造解析用のタグつきコーパスには、Penn TreeBank に対してタグを付与した NomBank¹ があるが、これは文内の項に限定してタグ付与したコーパスであり、文外に項がある場合を考慮していない。申請者たちは照応・共参照も含めたタグつきコーパスを作成しており、特に省略が頻繁に起きる日本語では、文内の項のみに情報を付与することは現実的ではない。

名詞句の項構造のタグつきコーパスとしては河原らによる京大コーパス Version 4.0² がある。彼らは4つの格に限定したタグを付与しているが、この基準が適切であるかどうかの評価はなされておらず、タグ付与対象のデータも5,000文と少ない。日本語の名詞句の項構造解析としては笹野らによる名詞の格フレーム辞書を用いた解析手法³がある。しかし、彼らは「AのB」という形に限定して名詞間の関係を収集しており、関係性の曖昧性解消の問題や、他のパターンを取得する手法に関しては提案されていない。

本研究の意義は、できるだけ少ないコストでコーパス・辞書を作成することと、作成した言語資源と大規模なタグなしコーパスとを組み合わせた機械学習による名詞の解析手法を提案することである。本研究が完成すれば、日本語学習支援など、フリーに使えるシソーラスを利用したアプリケーションの登場が予想される。小規模なタグつきコーパスと大規模なタグなしコーパスを組み合わせた手法が成功を収めれば、タグつきコーパスの作成にはコストがかかる一方、Web データは大量に取得できるため、今後このような手法が主流となっていく見通しである。

- (1) A. Meyers and R. Reeves and C. Macleod and R. Szekely and V. Zielinska and B. Young and R. Grishman, The NomBank Project: An Interim Report, HLT-NAACL 2004 Workshop: Frontiers in Corpus Annotation, 2004.
- (2) 河原大輔・黒橋禎夫・橋田浩一, 「関係」タグ付きコーパスの作成, 言語処理学会第8回年次大会発表論文集, pp.495-498, 2002.
- (3) 笹野遼平・河原大輔・黒橋禎夫, 名詞格フレーム辞書の自動構築とそれを用いた名詞句の関係解析, 自然言語処理, Vol.12, No.3, pp.129-144, 2005.

(4) 年次計画

(1年目)

[年度前半]

- 日本語の名詞句の項構造解析のための小規模なコーパスを設計
 - いくつかの関係性と項構造に関する情報を付与
 - 作業間の一貫性を検証するなどコーパスを評価
- 作成したコーパスを用いた複合名詞句解析
- 名詞句の項構造解析のための高精度な構文パターンの分析および獲得

[年度後半]

- 名詞句の項構造解析のためのコーパスを大規模化
 - タグづけする関係性の数を増加
 - 複数の分野(新聞記事・ブログ・評価記事・QAなど)でタグ付与
- 新聞記事延べ30年分、Web データ5億文などといった大規模なコーパスからシソーラスを自動獲得
 - 高精度・低再現率の構文パターンから始め、低精度・高再現率の構文パターンを用いてシソーラスを獲得するブートストラップ手法を適用

(2年目)

[年度前半]

- 獲得した構文パターンとシソーラスを組み合わせた名詞句の自動項構造解析
 - 比較モデルとして Girju et al や Pantel and Pennacchiotti などを実装
 - 事態性名詞の項構造解析モデルの適用
- 統計的機械翻訳を用いて名詞句の項構造解析の結果を評価

[年度後半]

- 自動獲得したシソーラスの公開と名詞句の項構造タグつきコーパス・辞書の公開
- 名詞句の項構造解析ツールの公開

4. 研究業績（下記の項目について申請者が中心的な役割を果たしたものがある場合は項目に区分して記載すること。申請者にアンダーラインを付すこと）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書（査読の有無を区分して記載すること。査読のある場合、印刷済及び採録決定済のものに限り、査読中・投稿中のものは除く）

- ① 著者（申請者を含む全員の氏名を、論文と同一の順番とする）、題名、掲載誌名、発行所、巻号、pp 開始頁－最終頁、発行年をこの順で記入すること。なお、著者の所属・職については脚注に記載すること。
② 採録決定済のものについては、それを証明できるものをP.8の後に添付すること。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(3) 国際会議における発表（口頭・ポスターの別、査読の有無を区分して記載すること）

著者（申請者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること）、題名、発表した学会名、論文等の番号、場所、月・年を記載すること。発表者に○印を付すこと。

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(3)と同様に記載すること。

(5) 特許等（申請中、公開中、取得を明記すること。ただし、申請中のもので詳細を記述できない場合は概要のみの記述でよい。）

(1) 学術雑誌等に発表した論文

[査読あり]

○ 小町守*, 台湾植民地期の言語政策－安藤正次と二語併用の台湾, 科学技術史, 日本科学技術史学会, 第8号, pp.31-55, 2005年.

(3) 国際会議における発表

[口頭・査読あり]

○ Mamoru Komachi, Masaaki Nagata §, and Yuji Matsumoto****, Phrase Reordering for Statistical Machine Translation Based on Predicate-Argument Structure, Proceedings of the International Workshop on Spoken Language Translation, pp.77-82, November 2006.

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

[口頭・査読なし]

- 小町守・飯田龍**・乾健太郎***・松本裕治, 共起用例と名詞の出現パターンを用いた動作性名詞の項構造解析, 言語処理学会第12回年次大会発表論文集, pp.821-824, 2006年3月.
○ 飯田龍・小町守・乾健太郎・松本裕治, NAIST テキストコーパス: 述語項構造と共参照関係のアノテーション, 情報処理学会自然言語処理研究会予稿集・NL-177-10, pp.71-78, 2007年1月.
○ 小町守・飯田龍・乾健太郎・松本裕治, 事態性名詞の項構造解析における共起尺度と構文パターンの有効性の分析, 言語処理学会第13回年次大会発表論文集, pp.47-50, 2007年3月.

[ポスター・査読なし]

- 飯田龍・小町守・乾健太郎・松本裕治, 日本語書き言葉を対象とした述語項構造と共参照関係のアノテーション: NAIST テキストコーパス開発の経験から, 言語処理学会第13回年次大会論文集, pp.282-285, 2007年3月.
○ 野口正樹†・三好健太†・徳永健伸‡・飯田龍・小町守・乾健太郎, セグメンテーションとリンクに基づくアノテーションツールの設計と実装, 言語処理学会第13回年次大会発表論文集, pp278-281, 2007年3月.

* 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科—学生

** 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科—特任助教

*** 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科—准教授

**** 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科—教授

§ NTT コミュニケーション科学基礎研究所協創情報研究部—自然言語研究グループリーダー

† 東京工業大学情報理工学研究科—学生

‡ 東京工業大学情報理工学研究科—准教授

申請者氏名 小町守

5. 自己評価

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人による自己評価を次の項目毎に記入すること。

①研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等

②自己評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績、受賞歴、飛び級入学、留学経験、特色ある学外活動など）

[研究者の志望動機・目指す研究者像・自己の長所]

研究者を志望するのは、自ら問題を発見し、自ら問題を設計し、自ら問題の解決に取り組む姿勢に強く惹かれるからである。大学院で計算言語学を専門にしようと思ったきっかけは、学部時代にプログラミングのアルバイトとして国立国語研究所にて「日本語話し言葉コーパス」の作成に携わる機会に恵まれたからであるが、現実的に解きたい言語学上の問題を分析し、コーパスを設計・作成して解析を行うといった研究に従事する機会に触れ、すでに答えがある問題を解く楽しさから、自ら問題を作っていく楽しさ見えてきたところである。現在も研究として「日本語書き言葉コーパス」の構築に関わっており、これからも研究者としてどこまで自分が通用し、現実的な問題を解いてこの分野の発展に寄与し、一般の人たちに喜んでもらえるか試していきたい。

自分が目指す研究者というのは、専門分野の研究に従事するだけではなく、隣接する分野の研究者や応用面での方向性を見据えた技術者とのつながりを重視し、中長期的な視野で人と技術のマネジメントを行うことができる研究者である。自ら調べ自ら考え自ら手を動かす自立型の研究者になるのと同時に、他分野の研究者に対しては意見をフィードバックしていくことと、自分が関わる要素技術に関しては、利用してくれる他分野の研究者・技術者に対して継続的にサポートし、頑健で広く使われる手法の研究・技術の開発を目指している。

研究者としては日本の大学の中に留まらず、企業で研究開発に従事したり、海外の研究機関で研究を行ったりするなどして研究者としての幅を広げることを考えている。前者に関しては博士前期課程でNTTの研究所で1ヶ月インターンを行ってから以降継続して共同研究を行っており、後者に関しては博士後期課程に進学してからシアトルのMicrosoft Researchにて3ヶ月のインターンを行っており、今後も大学の中に閉じない研究開発活動を続けていきたい。

研究を少し離れて自分の長所を考えると、人とのつながりを大事にする開放性、さまざまなことに興味を持つ好奇心、そして一つの物事に取り組むときの集中力が優れている。

一つ目は人とのつながりを大事にする点である。他大学との合同研究会や企業との共同研究、ソフトウェアの開発者の会議があれば努めて参加するようにしており、居心地がよいコミュニティの創出や維持、また新しい人を勧誘してコミュニティに巻き込んでいくのは大きな長所であると考えている。

二つ目の長所はさまざまなことに対する好奇心である。元々科学哲学から科学史、言語学、そして自然言語処理へと専門分野を移り変わってきたが、分野の枠にとらわれず貪欲に知識を吸収するという姿勢で幅広く学び、有機的につなげていく能力は突出している。

三つ目は物事を始めると短期間に集中して没頭する性格である。計算機に触れたのは大学に入学してからのことだが、大学3年のときにはオープンソースソフトウェアの開発者として活動を始め、学部の後期課程に入ってから取り組んだ科学史の研究で論文を書き、大学院での研究成果を博士前期課程2年の秋にはツールとして公開するなど、今後次々と研究・開発の成果を公開していくつもりである。

[自己評価する上で、特に重要と思われる事項]

自分は研究や仕事の成果をオープンすることを強く意識しており、Linux というオープンソースソフトウェアおよび Fink というソフトウェア管理システムの開発者の一員として学部時代から活動している。ソフトウェア開発者としては2005年7月に独立行政法人情報処理推進機構(IPA)が主催する未踏ソフトウェア創造事業(未踏ユース)に採択され、共同開発者の一員として「ユーザ参加型のパッケージ管理・斡旋システム」の開発に従事した。

ユーザと開発者の交流という観点からは、オープンソースカンファレンスや関西オープンソースという、開発者とユーザが交流する場に積極的に参加してユーザ向けのセミナーを行ったり、定期的に商業誌に記事を寄稿したりする活動が認められ、2005年11月には奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科特待生に選ばれ「オープンソース開発者支援プロジェクト」というプロジェクトで開発活動に対する支援を受けた。また、博士前期課程終了時には優れた学業成績・研究成果・学外活動が認められ、学内の最優秀学生賞を受賞した。

また、自己の長所にも挙げたとおり、自分はさまざまなことに興味を持つ性質があるので、異文化の中での生活を体験するため学部時代オーストラリアに1年間留学した。そのとき出会った友人といまでも連絡を取っており、長期休暇の際に訪ねて旧交を温めている。オープンソースソフトウェアの海外の開発者が日本に来るときは観光案内したりホストしたりと、いろいろな人と出会えることを楽しんでいる。

申請者氏名 小町守

平成20年度日本学術振興会特別研究員申請者に関する評価書 (DC)

本書式を <http://www.jsps.go.jp/j-pd/index.html> → 「申請手続き」 → 「募集要項(PD・DC2・DC1)」 → 「申請書等様式」 からダウンロードし、次頁に記載した特別研究員の制度並びに評価書作成上の注意点をよく読んで記入してください。

① 評価者の所属機関： _____ 大 学 _____ 学部・研究科・研究所
 _____ 研究所
 職： _____ 氏名： _____ 印

② 申請者
氏 名

③ 研究課題 (申請書の「研究課題」を記入)

④ 申請者の研究能力について

次のような観点から申請者の資質を評価し、□内にチェック又は■としてください。わからない場合は右端の「わからない」の欄を選択してください。

	特に優れている	優れている	普通	劣っている	わからない
・研究姿勢・忍耐力	□	□	□	□	□
・専門的知識・技量	□	□	□	□	□
・着想力・創造力	□	□	□	□	□
・コミュニケーション能力	□	□	□	□	□
・将来性	□	□	□	□	□

申請者の研究能力を総合的に評価してください (該当する項目を○で囲んでください)。
 これまでに指導した大学院博士課程学生 (約 _____ 名) の中で
 ア) 上位10%程度 イ) 25%程度 ウ) 50%程度 エ) 50%以下

上記の諸点に着目し、申請者の研究課題遂行能力及び我が国の学術研究の将来を担う人材となりうるかなどの資質について評価してください。

⑤申請者の研究者としての将来性を判断する上で特に参考になるとと思われる事項があれば記入してください。(例：特に優れた学業成績，受賞歴，飛び級入学，留学経験，特色ある学外活動など)

(評価書作成上の注意点)

- *本評価書作成の際は、日本語又は英語で記入してください。なお、手書きする場合は、黒インク又は黒ボールペンで丁寧に記入してください。
- *評価書作成者は、申請書記載の「現在の研究指導者」と同一であること。現在、研究指導の委託により他大学等において研究指導を受けている場合は、「現在の研究指導者」が委託先の受入研究者と連絡をとって作成してください。
- *本評価書は、審査の重要な資料となるので、当該申請者についてできるだけ具体的かつ明確に記入してください(DC1の場合、研究業績は未完成のものが多いと思われるため、特に詳細に書いてください)。
- *本評価書は両面印刷としてください。本書以外に新たに用紙を加えることはできません。
- *写しは6部(A4版、両面コピー)とり、本書及び写しを併せて封筒(角2)に入れ厳封の上、申請者が作成する申請書に添付してください(封筒の表に申請者名と評価者名を記載してください)。

特別研究員制度について

日本学術振興会特別研究員制度は、優れた若手研究者に、その研究生活の初期において、自由な発想のもとに主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与えることにより、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的として、大学院博士課程在学者及び大学院博士課程修了者等で、優れた研究能力を有し、大学その他の研究機関で研究に専念することを希望する者を採用し、研究奨励金を支給するものです。

参考：過去の採用状況(平成14～18年度)

年度	SPD・PD			DC			計		
	申請数	採用数	採用率	申請数	採用数	採用率	申請数	採用数	採用率
18	4,446	400	9.0%	7,440	1,186	15.9%	11,886	1,586	13.3%
17	4,689	480	10.2%	7,428	1,416	19.1%	12,117	1,896	15.6%
16	4,718	535	11.3%	7,429	1,048	14.1%	12,147	1,583	13.0%
15	4,836	716	14.8%	7,124	905	12.7%	11,960	1,621	13.6%
14	5,062	598	11.8%	7,050	763	10.8%	12,112	1,361	11.2%

※詳細は、本会「特別研究員」ホームページ(<http://www.jsps.go.jp/j-pd/index.html>) → 「審査」 → 「採用状況」をご覧ください。